歴史探訪

「うつくしま」への系譜

子どもの目を持ったお医者さま
「とんぼのめがね」と額賀誠志

全国津々浦々の子どもたちに親しまれ、歌い継がれてきた童謡「とんぼのめがね」。この詞を書いたのが、広野町のお医者さまだったことをご存じですか。その人の名は、額賀誠志（本名 誠）（1900～1964）。誠志は、町に医院を開業し、その献身的な態度から多くの町民に慕われるとともに、子どもたちに優れた童謡作品を数多く残しました。ここでは、広野町公民館の高木幸一さんにお話を伺いながら、子どもたちを愛し、子どもたちに夢を与える世界を描き続けた誠志の姿に、思いをはせてみました。

■子どもに愛情の灯をともす童謡を

誠志は、石城郡四倉町（現いわき市四倉町）で、代々が医者の家に生まれました。医学の専門学校を卒業してから北海道に渡り、函館で開業した誠志は、その当時からすでに、医療のかたわら童謡詩を作り、児童文芸雑誌「赤い鳥」の同人として活躍していました。「赤い鳥」は、北原白秋など多くの詩人を育てましたが、誠志もそのような同人達との交流の中で、童謡詩人としての資質を磨いていったと思われます。

とんぼのめがね歌碑
平成７年（1995）、広野町内の公園に建立され、以来、町の大きなシンボルの一つとなっています（歌碑の文字は、作曲者の平井康三郎により書かれたものです）

誠志が献身的な医療を施した、当時の額賀医院。町内はもちろん、近隣町村の住民からも、名医として大きな信望を集めていました

昭和12年（1937）、誠志は生まれ故郷の隣にある広野町で内科医院を開業しました。「当時、広野町が無医村であったことから、額賀先生にお願いし、来ていただいたと言われます」と、高木さんは話します。この開業前後、病弱のため約十年間は執筆活動を休んでいた誠志でしたが、ある転機が訪れます。それは終戦でした。誠志は当時の実情を憂えました。「戦後日本の子どもたちは、楽しい夢をのせた歌を歌えなくなった。子どもが卑俗な流行歌を歌うのは、あたかも、たばこの吸いがらを拾ってのむのと同じような悲惨さを感じさせる」――そう考えた誠志は、昭和23年（1948）、再び童謡への情熱を燃やし始めたのです。彼は子どもたちの未来を信じました。「子どもたちが大人になる頃には世界が国境線を撤廃し、全人類が一丸となって、愛情と信頼と平和の中に、画期的な文明が現出するであろう。その時に当たって、若い日本民族が、世界に大きな役割を果たすことを信じ、いささかなりとも、今日子ども達の胸に、愛情の灯をつけておきたいのである」。それは、時代の方向性を確かにとらえたスケールの大きな発想でした。子どもの純真さを持ちながら、大人の責任を自覚し、まっとうしようとした彼の人間性が、やがて不朽の名作を生み出すこととなります。

額賀誠志
子どもの目を持った詩人であり、献身的な地域の医者でもあった誠志の優しさが、「とんぼのめがね」をはじめとする数々の名作を生み出しました

■名作を生んだ優しい人柄

昭和23年頃、町内の箒平（ほうきだいら）地区に往診した誠志はそこで、子どもがとんぼと戯れて遊ぶ光景を目にします。山あいにあるその地は、のどかさの中に郷愁を感じるたたずまい。里山を背景に、無心に遊ぶ子どもの姿は、誠志の詩情を強く揺さぶったことでしょう。そうして彼が書いた「とんぼのめがね」の詩は、「山はしろがね……」で始まる「スキー」の作曲者としても広く知られる平井康三郎が曲をつけ、昭和26年（1951）、NHK東京放送局の番組「ラジオこどもの歌」の中で毎日歌われ、全国に広がったのです。当時NHKでは、レコード童謡の作詞・作曲家に頼らず、主に「赤い鳥」系の芸術童謡の詩人たちに作詞を託し、曲も商業的でない純音楽の作曲家に求めていました。この番組からは、次々と新しい童謡名曲が生み出されていきますが、誠志が詩を書いた「とんぼのめがね」は、そんな中でもひときわ珠玉の輝きをもつ名作として親しまれ、昭和26年頃には小学校の教科書に載るようになっていました。誠志の作品はこれにとどまらず、それから二十年くらいの間は、小学校の音楽の教科書に「とんぼのめがね」をはじめ4曲ほどが載っていたと言われます。子どもの感性を持ち、子どもの分かる詩情を大切にした誠志だからこそ、それほどまでに、作品の数々が親しまれたのでしょう。

「額賀先生は、往診時間に遅れると運転手をどなりつけるなど、患者思いのあまり、大人には厳しい面もありましたが、子どもにはいつも、ニコニコと接していた優しい先生だったそうです」と、高木さんは語ります。誠志の代表作の一つに「山のお医者さま」がありますが、その中に「診察料はいりません」という一節があります。実際に誠志は、本当に貧しい人からは診察料を取らず、どんなに忙しくても献身的な医療を施し、住民から厚い信望を集めていました。まさに「医は仁術」を地でいくような優しい人柄が、その作品の一つひとつから伝わってきます。

■歌の思いをいつまでも

広野町は、「今は山中今は浜（中略）ヤミをとおって広野原」と歌われる唱歌、「汽車」の舞台とも伝えられる町です。その広野町で、平成6年（1994）から、「ひろの童謡（うた）まつり」が催されています。この「まつり」では、古くから歌い継がれてきた童謡や、全国から詩を応募した作品から生まれた童謡が、童謡歌手と町内各団体の共演により披露されています。また毎年、「まつり」の中で選ばれた新しい2曲を、「広野発」の新しい童謡として、全国に発信し続けています。さらに平成10年からは歌唱コンクールが加わり、ますます「童謡に親しむ町」として広く知られてきています。高木さんは、「この『まつり』の中で、『とんぼのめがね』は毎年、全員の合唱で歌われるんですよ」と話します。老若男女を問わず、町の人々が心を合わせて歌う童謡。それが「とんぼのめがね」なのです。誠志は、子どものような「感性の豊かさ」と、大人としての「良心と知性」を持ちあわせていました。そして彼には、測りしれないほどの大きな優しさがありました。だからこそ、いつの時代も心に響く「普遍性」を備えた名作を、世に送り出すことができたのかもしれません。

近年では、ヒット曲といっても、世代がちょっと違えばほとんど知られず、数ヶ月で消耗品のように忘れ去られる音楽が、決して珍しくはありません。そんな時代の中で、童謡「とんぼのめがね」を歌うとき、わたしたちは、子どもからお年寄りまでが同じ歌を口ずさみ、感動を共有できる、そんな「歌の底力」への敬意を感じずにはいられません。誠志の思いは、これからも歌い継がれていきます。純真な子どもたちや、子どもの心を持ち続ける大人たちがいる限り――。

作詞の舞台となった、箒平地区の風景。誠志は、山あいのこの地に往診した際、子どもがトンボとたわむれている情景を目にし、詩にうたいました

「誠志の作品は、当時から多くの冊子で紹介され、1930年版の『年刊新興童謡集』（写真上の中央）には、そうそうたる作家陣の中に、誠志も名を連ねています」と話す高木さん（写真・左）

平成6年から開催されている「ひろの童謡まつり」。作詞コンクールには全国から多数の応募が寄せられ、歌唱コンクールなども行われるなど、童謡の発信地として全国をリードし続けています

日本音楽著作権協会（出）許諾第0306603-301号